兵鼓

井上靖

大鼓

井上靖

文藝春秋

© Yasushi Inoue. 1977

兵鼓

昭和五十二年五月二十五日　第一刷

800円

著者　井上靖

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

郵便番号（102）
東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五―一二一一

本文印刷　凸版印刷
製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《長編小説》

兵鼓

内容目次

八章 114
七章 85
六章 79
五章 72
四章 58
三章 45
二章 22
一章 7

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

九章 128
十章 142
十一章 149
十二章 155
十三章 163
十四章 169
解説 福田宏年 179

兵鼓

装幀　平山郁夫

一　章

源三位頼政が、当時清盛のために鳥羽殿に幽閉されている後白河法皇の第二皇子以仁王と謀り、平家討伐を策したのは、治承四年三月の末のことである。丁度一カ月前の二月二十一日には、高倉天皇が僅か三歳の幼帝安徳天皇に御譲位あるなどして、世人の清盛を初めとする平氏一門に対する憂憤はその極に達していた。

頼政は源頼光の玄孫で、源家の血を持つ武人であったが、その過去の去就進退から見ると、終始清盛の味方となっていた。そのために清盛の推挙で従三位に叙せられていたが、頼政は必ずしもそれに満足しているわけではなかった。何と言っても、天下の権を握って栄華を誇っている平氏一門の中とあっては、あくまで異分子たるを免れなかったし、平氏にとっては俱に天を戴かざる源氏の片割であることには違いなかった。

頼政は時に七十七歳であった。平治の乱以後の専横が積り積って、人心全く平氏より離反したのを見てとると、頼政は残り少ない生涯を乾坤一擲の勝負に賭けようとしたのである。それは争うことのできぬ源家の流れを汲む者の血のざわめきでもあり、永年平氏一門の重圧に打ちひしがれていた武人の、それまで決して表面に出ることのなかった怒りが、突然出口を求めて奔騰するに似ていた。

頼政は以仁王を奉じて挙兵するに当って、東国に散らばっている源氏の血に繋がる者の蹶起を促し、その蜂起に依っていっきに平氏を滅亡に導く作戦を樹てた。これは作戦として当然考えらるべきことであり、また充分実現の可能性のあることであった。

頼政が以仁王の令旨を伝達する相手として先ず選んだのは、伊豆に配流されている源家の嫡流である頼朝と、甲斐の武田信義、木曾の義仲の三人であった。これら三人の旗挙げによって、全国の不平分子はいっせいに起ち上がるであろうと思われた。

頼政がこの重大な使命を託したのは、源義盛であった。義盛は為義の第十子で、頼朝や義仲の叔父に当り、保元・平治の乱で一族が尽く平氏のために滅ぼされたあと、熊野に逃れて新宮の豪族に匿まわれていたが、たまたま京都に上って頼政を訪ねたことから、この大役を仰せつかることになったのである。義盛はこの話を頼政から持ち出された時、二つ返事でこれを引き受けた。義盛はこの時既に四十歳の半ばを越していた。このまま熊野にこもっていては、世に出る望みは全く断たれているわけである。併し、若し頼政の命による仕事に成功すれば、そこから得るものは大きい筈であった。源氏の統領として、どのような地位にでも就けると思われた。

頼政は義盛を以仁王に謁せしめ、蔵人とし、行家と改名させて王の令旨を授けた。

令旨は東海、東北、北陸三道の諸国の源氏並びにその群兵等に下したものであって、清盛並びにその従類の叛逆の輩の追討を促し、その言辞はこれまでの令旨の体裁をとらぬ頗る激越を極めたものであった。日付は治承四年四月九日と認められてあった。

義盛改め行家は令旨を奉じると、二名の供を連れて京都を出て、先ず自分と関係のある熊野の新宮に向った。そしてその地方の豪士たちに大事を打ち明け、志ある者の糾合を謀ったが、併し、これは結果から見ると失敗であった。以仁王に挙兵の企てあることを清盛に通ずる者が出て、このために大事は未然に発覚され、行家が京を出てから一カ月後には、以仁王及び頼政は生命を落すことになったのである。

そんな結果を招くことになろうとは露知らぬ行家は、新宮での策動を終ると、直ちに頼朝の居る伊豆を目差した。そして四月二十七日に行家は頼朝に会い、挙兵を勧誘した。頼朝は時に三十四歳であった。頼朝はこれまで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に諸国の源氏の流れを引く者たちと、それとなく連絡を持っていたので、彼が起ち上がるとなれば、彼の許に馳せ参ずる者は相当の数にのぼる筈であった。

行家は頼朝に会った時、自分より十歳以上も若い武人に対して何となく不快なものを感じた。頼朝は令旨を伝えた時だけそれを恭しくお受けすると返事はしたが、行家に対してはどこかに不遜な態度があった。事を挙げれば同じ陣営にあって生死を共にしなければならぬ同志ではあり、しかも血の繋がる叔父に当るわけであるのに、令旨を受けただけで、彼はいつ旗挙げするとも、いかなる策を施すとも、細かいことは一切相談しようとしなかった。京都付近の人心が、平氏一門からいかに離反しているかを具さに訊いただけで、自分の方のことは何事も洩らさなかった。

頼朝は、行家という人物を心中あまり信用していなかった。行家を信用しない許りか、以仁王と頼政の挙兵のことが必ずしも成功しようとは考えていなかった。頼朝としては、ただ京都がそうした情勢にあるということを知ることができただけで、行家が彼の前に現われた意味は充分であった。頼政の挙兵と同時に、自分も旗を揚げる。併し、自分はそれに呼応すると見せかけて、おそらく単独行動に移ることになろうと考えていた。まだ会ったことのない頼政や以仁王を、その人柄をどうして信用することができるだろう。挙兵するのは、自分が先でなく、頼政の方が先でなくてはならぬ。

行家は頼朝のところを辞すと、直ちに甲斐の武田太郎信義のところへ廻った。信義は五十三歳の武将であった。信義はもともと頼朝に好意を持っており、頼朝が挙兵するなら、それと同時に自分もまた挙兵しようと、こんどの企てに賛同した。

行家はそれから木曾へと赴いた。この途中に於て行家は、京における策謀が事前に露顕し、以仁王と頼政の軍勢が破られたという事件を知った。すぐにでも京へとって返すべきかと思ったが、兎に角与えられた任を果すのが妥当であると考えて、行家はそのまま道を変えずに旅を続けた。

行家は木曾へ辿り着くと、木曾河畔の要害の地に設けられた中原中三権守兼遠の館を訪ねた。

義仲は頼朝と同じく為義を祖父とし、頼朝とは従兄弟の間柄にあった。

義仲の父義賢は義仲が二歳の時、甥義平に討たれ、義仲もその時義平に殺されようとしたが、畠山重能に依って救われ、斎藤実盛に託された。そして実盛の手に依って、義仲の乳母の夫である木曾の豪族中原兼遠の許に預けられ、そこで養育されて今日に到っていた。幼名を駒王丸と言い、木曾次郎と称した。義仲時に二十七歳であった。

義仲は行家という未知の人間が、秘密の使者としてわざわざ京からやって来たことを知ると、すぐ彼を兼遠の館の一室に招じ入れた。

義仲は初め上座に坐り、行家を引見する態度をとったが、行家が令旨を奉じていると聞くと、すぐ座を降りて行家を上座に据えた。

義仲は行家が読み上げる令旨を、頭を下げた姿勢で聞いていた。その文面はひどく難解なものであった。兵を挙げて逆賊平氏を倒せという趣きであることを知ると、義仲は、

「有難くお受けして、以仁王の御心に添うように努力いたしましょう」

と一語一語はっきり口に出して言った。その声はがっちりした体に比して、ひどく低く静かなものであった。

行家はそれから、今回の策動が平氏に知れるところとなって京に戦乱が起っているので、急ぎ帰って以仁王と頼政に事の次第を報告しなければならぬと言った。すると義仲は、行家の顔を黙って暫く見詰めていたが、

「まだご存じないように見うけられますが、以仁王、頼政のお二方とも、既に討死なされました」

と言った。義仲の言葉に嘘があろうとは思われなかった。

義仲を前にして、行家は自分の顔色が蒼白に変って行くのを感じていた。行家は声も出ないまま、そこに坐っ

ていた。

やがて義仲は静かに口を開いた。

「以仁王は亡くなられましても、宮の御遺志は、義仲が受け継ぎましょう」

併し、彼もまた頼朝と同じように、それ以上具体的なことについては、一言も触れなかった。

行家は義仲がこのような山中に居ながら、どのようにして以仁王と頼政の死を知ったかを不思議に思った。

それから二日間、行家は木曾に留まっていたが、その間行家は手厚く遇された。義仲は行家さえよければ木曾に長く留まって貰ってもよいと言った。併し、行家はそれを辞し、頼朝の居る伊豆を目差した。何と言っても自分の身を寄せるところとしては、頼朝の許に居るのが一番安全な気持がしたし、頼り甲斐があるように思われた。

行家から以仁王の令旨を授かったことは、義仲にとっては何と言っても大きい事件であった。義仲は中原家の者たちから源氏の御曹子として臣事され、これまで大事に育てられて来たが、二十七歳の今日まで、自分の進むべきはっきりした目標は持っていなかった。

体は人一倍大きく、武力にかけても胆力にかけても、人に劣るということはなかった。併し、果して自分がどれ程の実力を持っているかということになると、皆目見当がつかなかった。実戦に参加したこともなければ、人を統率した経験もなかった。

十三歳の時、祖先の八幡太郎義家の故事を継いで石清水八幡宮に詣って元服し、それまでの駒王丸の名を義仲に改めて木曾次郎と称したが、そうした取り計らいはすべて義仲を育て上げた、謂わば養父とも言うべき中原兼遠の指図に依るものであった。

兼遠は常に、義仲の体の中に流れる血は、木曾の土豪たちのそれとは全く違ったものであると義仲に言い含めていた。義仲自身もそれを信じ、それを誇りとしていたが、併しそれに依って、義仲の生きて行くべき方向が決められているわけではなかった。彼は中原家の一員として、木曾山中で周囲の誰とも変らぬ生活を続けて来たの

であった。

義仲は、兼遠から、源氏の血を分けた人間であるという以外何物も教えられてはいなかった。世は平氏の天下であり、うっかりしたことは口から出せなかったし、また平氏を討って源氏を再興するなどということは、夢想だにし得ないことであった。

併し、義仲は以仁王の令旨に依って、この時初めて自分が、自分の持っている特殊な血が、何を為さなければならぬかを理解した。源氏を再興することがいかなる意味を持つか、自分が軍勢を引き連れ、京にはいって、平氏を滅ぼすことが、いかなる意味を持つかは全く判断できないことだったが、兎も角それを為さなければならぬということだけが、以仁王の令旨に依って決ったわけであった。

令旨は神の至上命令であり、天の啓示であった。自分はいままで、この時の来るのを待って生きて来たのだと思った。

これまで義仲は、自分の存在が都の高貴な人の間に知られていようとは一度も考えたことがなかった。兼遠と自分の囲りの極く僅かな人間だけの知るところであると思っていた。それが、夢想だにしなかったことが現実となって現われたのであった。

義仲は木曾の山中にはあったが、中央の情勢には比較的よく通じていた。それは養父の兼遠が京都に居て、彼に依ってその消息は絶えず伝えられていたからである。以仁王、頼政の乱も、それがいかにして起り、いかなる終末を持ったかも、兼遠によって知らされていた。そうした兼遠の配慮に依って、義仲は兼遠の子供たちと一緒に天下の情勢には一応通じていた。

義仲は行家から以仁王の令旨を授かったということは、中原家の誰にも話さなかった。心の中で、それを一人で大切に温めていた。

義仲は妻と一人の子を持っていた。妻は同じく源家の血を引く者の娘で、義仲と同様に身寄りがなく、幼時から中原家に於て育った女性であった。

彼女がいかなる出生の秘密を持つかは兼遠一人の胸の

中にあることで、中原家の誰も知らされてはいなかった。その妻との間に、八歳の義高があった。

行家が木曾を去ってから、日は矢のように流れて行った。義仲の生れながらにして持つ精悍な顔には血が走り、人を射すくめるような眼には、どこかに憑かれたような光が加えられていた。

義仲は表面何事もしていないように見えたが、彼は密かに信濃一円に散らばっている土豪たちに働きかけていた。一朝自分が兵を挙げた場合、彼等が果して自分に従うか否かを打診しなければならなかった。彼等が現在の権力者平氏一門に対していかなる利害関係を持っているか、それからまた彼等相互間にどのような姻戚関係の網の目が張り廻らされているか、そうした面からも、信濃の土豪たちの向背を一応心に留めて置かねばならなかった。

義仲は自分と同様に、甲斐の武田信義、伊豆の頼朝もまた令旨を受けたことを知っていた。併し、彼等に対しては何の連絡を持とうともしなかった。甲斐からも伊豆からも使者は来なかった。おそらく、お互いに気心も判らぬ相手に使者を送ることは危険だという考えは、誰の胸にもあったのであろうと思われた。

こうした義仲のところへ、ある日突如甲斐の武田信義からの使者と称する者が三名、早馬をもって駆け込んで来た。八月の終りのことであった。義仲は兼遠の館の庭で使者を引見した。使者はいずれも小柄の武士で、三人の中では一番年配と思われる一人が、少し甲高い声で、頼朝の挙兵と、それに応じての信義の挙兵を報せ、義仲の蹶起を促す信義の言葉を言上した。

三人の使者は短い休息を取ると直ちに引き返して行った。

その夜、義仲は中原家一門の主だった者だけ十人を集め、初めて以仁王の令旨のことと、突如起った東国の挙兵のことを伝えた。義仲は、自分自身は起つとも起たぬとも言わなかった。突然のことで判断がつきかねるという面持で、口を噤んでいた。

誰も容易に口を開かなかった。いまここで挙兵を宣言しても果してどれだけの兵力を集めることができるか、誰にも皆目見当がつきかねるという風であった。

集まった者の中に、一人の若い女がいた。兼遠の娘で、この年二十四歳になる巴である。

義仲は巴が燈火の光にその色白の顔の半分を浮かび上がらせながら、真直ぐに自分を見詰めているのを見た。

「巴、どう思う?」

義仲は自分自身でも驚いたほど、それは自分が意識しないで口から自然に飛び出した言葉であった。巴は瞬間はっとしたらしかったが、すぐに、

「既にお心が決っている方の言葉とも覚えませぬ。なぜそのようなことをお訊きになるのでしょう」

と言った。

「自分一人の心は決っていても、皆の者が反対しては、事を挙げることはできないではないか」

義仲は巴に向って答えながら、皆に言っているつもりだった。すると、

「義仲様のおできにならないことが、この世にあるのでございましょうか。義仲様が兵を挙げたと聞けば、信濃の武士たち尽くが、風を慕って集まって参りましょう。合戦をすれば、必ず勝たれます。そのようなお生れつきであることは、御自身が百も承知のことではありませぬか」

巴の声は辺りを憚らなかった。誰に遠慮をすることがあろうかという凜とした響きがあった。

その巴の言葉が終るか終らぬかの時、義仲はすっくと立ち上がった。その立ち上がり方も、義仲自身予期しないものであった。義仲は口を開いた。

「巴の言う通り、義仲の気持は既に決っている。明朝八時を期して兵を挙げる。義仲に、ぬしらの生命を預からせてはくれぬか。この館に集まる者午刻(ひる)までには三百を下るまい。時を移さず木曾谷を北上し、先ず信濃一円の懐柔を図る」

その宣言は、皆の顔に動揺の色を与えたが、それもすぐ納まると、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com